

主題 「ストーマケアに対する問題点と対策」 - 1

化学療法中のストーマ周囲皮膚炎に難渋した直腸癌患者の1例

特定医療法人 同心会 遠山病院

○後久和美、久保志津子、奥村恵子、野村英毅、井上靖浩

症例は58歳女性。直腸癌に対する腹会陰式直腸切断術後の骨盤内再発に対し、FOLFIRI+パニツムマブ療法が導入された。化学療法導入前より軽度のストーマ周囲皮膚炎を認めていたが、パニツムマブに伴うざ瘡など全身皮膚障害と相関して、ストーマ周囲皮膚炎も増悪した。定型的なスキンケアとパニツムマブのオンオフにより安定していたが、化学療法導入10ヶ月目にストーマ周囲に疼痛を伴う広範な潰瘍を形成した。壊疽性膿皮症を疑い、皮膚生検なども施行するが確定には至らず、化学療法の休薬とスキンケアで一時軽快した。以後、化学療法の継続とストーマ周囲皮膚炎によるQOL低下のバランスに難渋しつつ、再発から2年4ヶ月の現在、外来治療中である。化学療法中のストーマ保有者は、皮膚障害のリスクも高く抱える不安も強い。今回、ストーマ外来と化学療法室が密に連携し、腫瘍学的予後と患者QOLのバランスを維持している1例を報告する。

主題 「ストーマケアに対する問題点と対策」 - 2

回腸カバーリングストーマにおける皮膚障害を克服する

愛知県がんセンター 消化器外科部、看護部

○大内 晶、小森康司、木下敬史、大城泰平、國友愛奈、沖 哲、末永泰人、前田真吾、
小島 瞳、佐々木照美、安形真由美

背景：回腸ストーマは結腸ストーマと比べて合併症の頻度が低いが、皮膚障害の頻度が高く時に患者の QOL を低下させる。

目的：回腸カバーリングストーマ (diverting loop ileostomy: DLI) における皮膚障害のリスク因子を検討する。

方法：2013～2017年に当科で DLI を造設した症例を対象として、皮膚障害（定義：ストーマ周囲の皮膚のびらん・潰瘍）と関連する因子を探索した。

結果：対象期間で DLI は 214 例に造設され、うち化学療法の影響を考慮して StageIV 症例を除く 154 例を解析の対象とした。全体で 154 例中 48 例 (31.2%) に皮膚障害を認めた。皮膚障害を生じた患者は BMI が高く（以下中央値、23.3 vs 21.2 kg/m²、P < 0.001）、ストーマ高が低かった (16 vs 20 mm、P < 0.002)。多変量解析でも肥満 (BMI > 25.0 kg/m²: OR 4.03、95% CI 1.56 - 10.42)、ストーマ高 (< 20mm: OR 2.81、95% CI 1.33 - 5.95) が皮膚障害と有意に関連していた。

結語：DLI で 20mm 未満のストーマ高は皮膚障害と関連していた。十分な高さを有するストーマが患者の QOL を保つために大切である。

主題 「ストーマケアに対する問題点と対策」 - 3

凹面型装具を使用した5事例を通して、有用であったストーマの特徴について

地方独立行政法人 三重県立総合医療センター

○林 恵里、大川 恵美

昨今、技術開発の進歩により新しい機能を備えた装具が発売され、ストーマ装具は多種多様となっている。2020年には、ストーマ・排泄リハビリテーション学用語集の面板の形状に「凹面型装具」が収載され、ストーマ装具の選択肢は広がっている。一方、複雑性が増しているため、誰もが同じケアを提供できるように、シンプルで継続しやすいケア方法やストーマ装具であることが望まれる。ストーマ装具選択にはストーマ装具の構造や特徴をよく理解し、ストーマの状況、周囲の皮膚状態、腹壁の状態、全身的状况、患者のニーズ等に応じて多様な知識を統合して判断することが必要となる。

2018年から発売されたCPBES系凹面型装具は、ふくらんでいる腹壁により密着し追従する装具であり、ストーマ保有者のQOL向上のための革新的な装具とされている。当院では2020年1月までに5事例を経験し、CPBES系凹面型装具を選択する際の参考になる特徴が示唆されたので報告する。

一般演題 - 1

局所再発直腸癌および肝転移切除後の長期生存例に発症した下行結腸ストーマ部癌の一例

名古屋大学医学部附属病院 消化器外科

○村田悠記、上原圭介、相場利貞、小倉淳司、山東雅紀、田中 綾、大原規彰、神野孝徳、佐藤雄三、服部憲史、中山吾郎、江畑智希、小寺泰弘、椰野正人

症例は66歳の男性で、8年前に他院で直腸癌（pT3N0M0）に対し腹会陰式直腸切断術を施行後、局所再発および肝転移（S4/S7に2個）のため当院を紹介受診した。恥坐骨合併骨盤内臓全摘術（TPEP）＋肝部分切除でR0手術が達成できた。その術後8か月、肝S8に単発の残肝再発を認めたため、肝部分切除を施行し、その後は長期間無再発でchemo freeの期間を得られていた。初回手術後約12年、TPEP後8年でストーマ部に2型の進行癌を認め(cT2N0M0)、異時性の下行結腸癌と診断し根治手術を施行した。手術は、人工肛門部をくり抜き、腹腔内で1群リンパ節郭清を伴う下行結腸切除術を施行し、人工肛門を再造設した。病理結果はpT3N0M0、pStage IIaで、補助療法は行わなかった。TPEP術後9年8か月、ストーマ部癌術後1年3か月の現在、無再発生存中である。ストーマ部癌は稀な症例であり、報告する。

一般演題 - 2

一時的回腸人工肛門造設後の High output stoma が術後経過に及ぼす影響

名古屋大学医学部附属病院 消化器外科

○野々垣郁絵、中山吾郎、佐藤雄介、服部憲史、相場利貞、上原圭、山田豪、小池聖彦、藤原道隆、小寺泰弘

【はじめに】下部直腸癌に対する低位前方切除術や潰瘍性大腸炎に対する大腸全摘術では、縫合不全の予防目的で一時的回腸人工肛門を造設することが多いが、一方で High output Stoma (HOS)の発生が問題となる。今回、HOS が術後経過や腎機能に与える影響について検討を行ったので報告する。

【方法】当科で一時的回腸人工肛門造設した121例を対象とした。1,500 ml/日以上 of 排泄が3日間以上続く場合をHOSと定義し、HOS群(40例)と非HOS群(81例)に分けて患者背景因子、周術期因子との関連、術後の腎機能の推移を後方視的に検討した。

【結果】HOS群では非HOS群に比して男性、大腸全摘症例が多く、術後感染性合併症発生率が高かった。術前のeGFR値に有意差は認めなかった。人工肛門閉鎖術前eGFR値は、初回手術時eGFR値と比較し両群とも有意に低下していたが、eGFRの低下率はHOS群で大きかった。また、人工肛門閉鎖術後1年のeGFR値は両群とも改善が見られず、HOS群で有意に低かった。

【結語】HOSは腎機能低下をきたし、その影響は人工肛門閉鎖後も持続する。

一般演題 - 3

超高齢ストーマ造設患者の家族看護 ～フィンクの危機理論を用いて～

桑名市総合医療センター 看護部

○西田勇人、柴田若奈、牧野ゆみ、鍛冶奈津子、早川久見子、鯉登咲織

近年、高齢社会に伴い、超高齢でのストーマ造設患者が増加している。そのため、超高齢患者のストーマケアについて、家族の支援は必要不可欠なものである。今回、超高齢患者のストーマケアに携わり、家族看護の重要性について明らかにしたので報告する。

症例、90歳代女性。疾患は低位進行直腸がんで入院。長女夫婦と3人暮らしでキーパーソンは長女。予定手術でS状結腸ストーマ造設術が施行された。

入院時家族は、退院後の生活についての不安表出もなかった。しかし、患者が術後せん妄状態になり、家族は患者の状態を見てショックを受けていた。時には涙を流し、ストーマケアの継続に不安を抱えていた。そのため、家族の状態に応じた関わりが必要であり、フィンクの危機理論を適応した。

家族の想いを尊重し、寄り添い、ストーマ造設後も家族の状態に合わせた関わりは、家族の不安の軽減や、家族の心理的状态の理解に繋がった。

一般演題 - 4

オストメイトのケアプランを推進するケアマネジャーと看護職、
介護職を対象にした研修会 in 愛知の運営

- 1)名古屋産業科学研究所
 - 2)グリーン訪問看護けろっと、3)名古屋大学大学院医学研究科泌尿器科学、
 - 4)愛知県がんセンター消化器外科 5)豊橋市民病院 外科、こう門科、6)服部病院、
 - 7)総合上飯田第一病院
- 前川 厚子¹⁾、夏目 尚実²⁾、後藤 百万³⁾、小森 康司⁴⁾、柴田 佳久⁵⁾、丸田 守人⁶⁾、
加藤 知行⁷⁾

ストーマ保有者の超高齢化と独居・介護力不足、終末期の到来は、居宅療養支援の在り方に変化をもたらしている。ケア計画を推進するケアマネジャー、訪問看護師、介護士、ヘルパーなどは専門基礎教育を受けてからストーマ保有者の日常生活支援を業務とすることが必須であるが、研修不足は否めない。

2012年にJSSCRは消化管と尿路ストーマ管理の講義/実習を含む介護サービス担当者研修を提案している。愛知県内では、名大在宅看護学教室が2010年から在宅ストーマケア研修会を運営してきたが、2015年度からは日本オストミー協会愛知県支部と共催し、愛知県社会適応訓練事業「介護職向け研修会」に発展した。

2019年度は、あま、大府、知多半島、名古屋、東三河の医療圏で5回開催し、延べ218名が受講した。ケアマネジャーは69名(32%)、うち主任ケアマネジャーが30名(14%)で、地域包括支援制度の枠組みで行政や社協、愛介連、看護協会の協賛が得られたことが成果である。

一般演題 - 5

経肛門的洗腸療法を実施する脊椎障害患者の褥瘡予防の一例

1) 藤田医科大学病院 看護部 2) 藤田医科大学病院 国際医療センター
○藤城尚美¹⁾、前田耕太郎²⁾

【はじめに】経肛門的洗腸療法（以下 TAI）は経肛門的に直腸内へ微温湯を注入し、直腸から下行結腸の便を排出する排便管理方法である。今回、仙骨部の褥瘡に皮弁術を行った患者に TAI を導入し、褥瘡が再発せず排便管理ができていたので報告する【倫理的配慮】藤田医科大学病院看護研究倫理審査会の承認を得た【経過】脊髄梗塞により下半身麻痺、膀胱直腸障害となった。褥瘡が発生し皮弁術を施行後、排便管理に難渋したため TAI を導入した。現在 2 日に 1 回、1 回 500ml の微温湯で施行している【結果】治療開始時は VAS : 1.7、排便回数 12 回/週であり、治療開始後の VAS : 8.7、排便回数 2 回/週と改善した。失禁はなく、褥瘡の再発や皮膚障害の発生もない【考察】排便管理が困難な脊椎障害患者に TAI を実施することで、失禁はなく排便管理が可能となり、褥瘡の発生予防にも寄与できたと考える【まとめ】TAI は脊椎障害患者の排便管理を確立させ褥瘡発生予防となる可能性がある

一般演題 - 6

緩和ケア病棟におけるストーマ・瘻孔管理
～ “最後まで生ききる” 支援をするためのスタッフ育成～

藤田医科大学病院 看護部

○山村 真巳

【目的】 がん終末期では、病状の進行に伴うストーマ・瘻孔局所の変化により、適切な管理方法の検討が必要となることが多い。今回、緩和ケア病棟でのストーマ・瘻孔ケアに関わる管理の大切さを再認識し、看護師の育成について検討した。

【方法】 2019年12月から2020年2月までに介入したストーマ・瘻孔ケア症例の病状、管理状況と対応を振り返り、スタッフ育成をすべき点について抽出する。

【結果・考察】 介入した症例は、ろう孔ケア2例、ストーマケア2例であった。いずれも疾患の進行による局所状況の変化が生じ、初期対応はできているが、適切な管理方法の指導を要するものがあつた。緩和ケア病棟への入院件数は消化器疾患が約5割であり、今後も皮膚・排泄に関わるニーズは高まると予想する。患者の病状変化を予測し、皮膚・排泄ケアに関わる正しい知識のもと、適切なアセスメント能力と実践力を養い、患者が『最後まで生ききる』支援をすることが大切と考える。